情動する空間

公共スペースに生まれるプライベート

指導教員　吉松秀樹教授　印

8AEB2136　古水　優

1. 問題意識

ライブを見ている時、そこに出来上がる独特の感情が大きく高ぶる空間に興味を持った。そのライブハウスでの体験は、どこから生まれてくるのか疑問に思った。(Fig.1)

Fig.1　音楽で自分の場所を作り、生演奏の価値が薄れた現状

2. ライブハウス

ライブハウスでの空間体験は非日常的なもので、そこでは音楽の良さを感じることが出来る。しかし、ライブハウスに足を運ぼうとする人は少ない。(Fig.2.3)

Fig.2　ライブハウスに行く理由

Fig.3　ライブハウスに行かない理由

3. サウンドスケープの概念

すべての景観において、サウンドスケープは存在している。(Fig.4) サウンドスケープにはハイファイとローファイがあり、ハイファイなサウンドスケープとは、環境騒音レベルが低く、個々の音がはっきり聞き取れるサウンドスケープを意味する。(Fig.5.6)

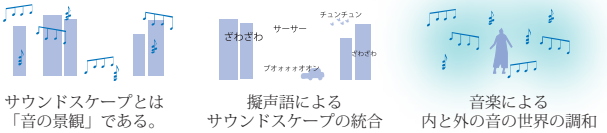


Fig.4　サウンドスケープの概念

Fig.5　都市のハイファイ・ローファイ

Fig.6　音がクリアでハイファイな空間

4. 音楽と建築

数学から考えたヤニス・クセナキス、音楽理論から考えたダニエル　・リベスキンドなど、いろんな方向から音楽と建築を考えた人はいた。(Fig.7)

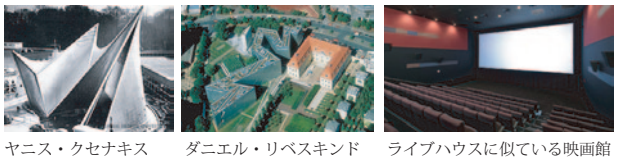


Fig.7　音楽から考えた建築

5. ライブハウス分析　- 府中 FLIGHT-

ライブハウスは本来、音楽を楽しむ飲食店である。裏表はあるものの、完全な動線分離などはほとんど行われていない。階段は私的であり、トイレはとても狭く数も少ない。(Fig.8.9)

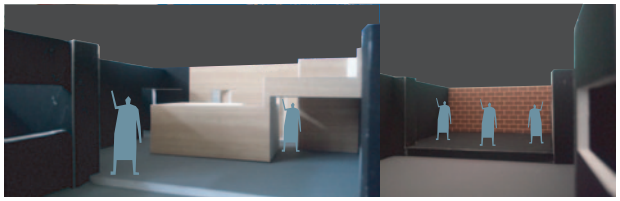


Fig.8　府中 FLIGHT 模型

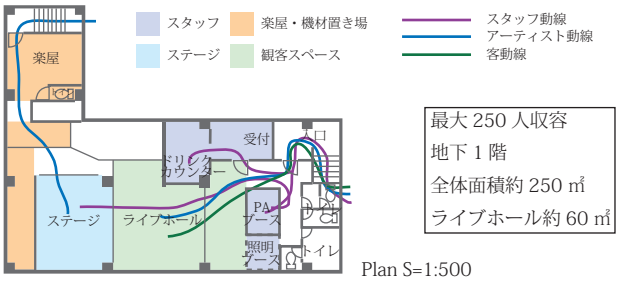
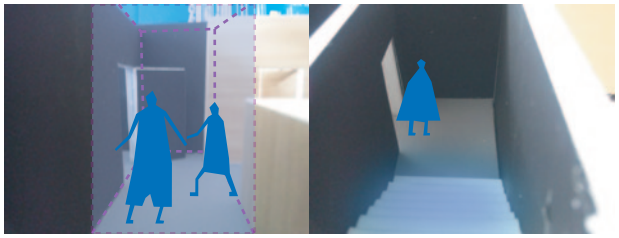


Fig.9　府中 FLIGHT

人数に対して量やスケールのおかしい空間があることで、ライブハウスが公共の場所であることを感じさせず、気を緩ませる、居やすい空間にさせているのではないかと考えられる。(Fig.10)



幅の狭い通路　　急で幅の狭い階段

Fig.10　窮屈なスケール